開府500年を学ぶ No.9

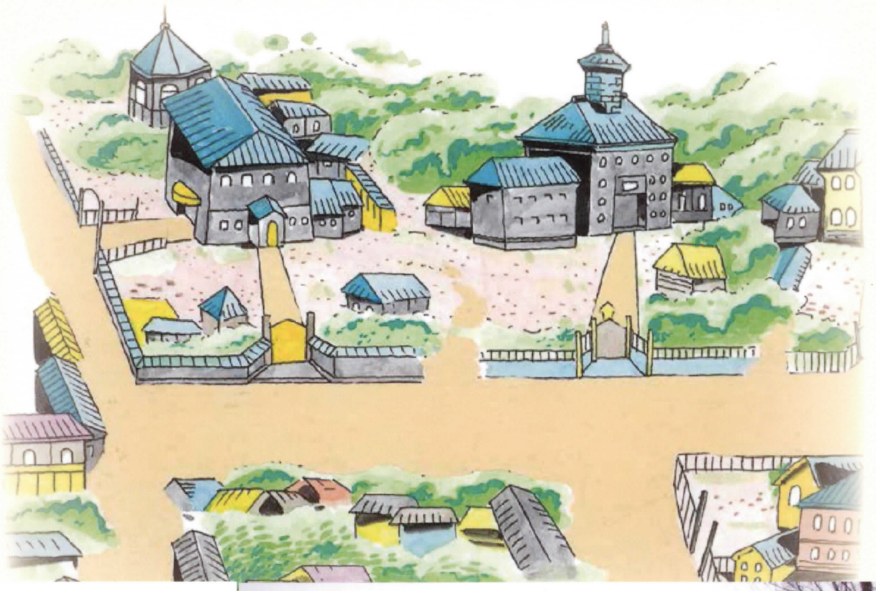
藤村紫朗と明治維新

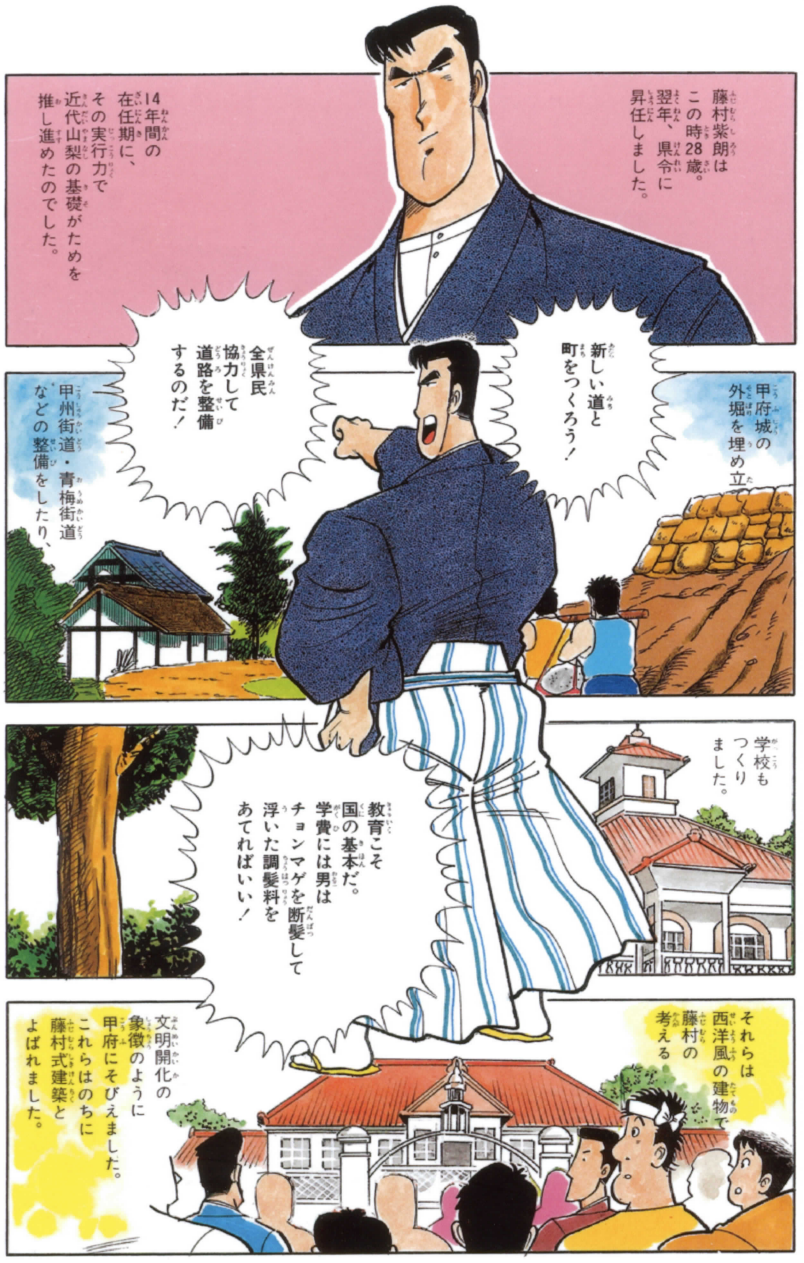
武士の世から文明開化へ

江戸時代の甲府城とその城下町には三重の堀が設けられ、外敵の侵入を防ぐとともに、城主・家臣・町人の住む場所を区分けしていました。

明治維新後、通行のさまたげとなる城の堀を埋め、石垣を崩し、新たに市街地を広げました。

明治10(1877)年、甲府を訪れた英国公使アーネスト・サトウは『この町の西洋建築を模倣した建築物の数は、街の規模からすれば私が知る限り日本一だ。』と日記に書いています。





藤村記念館(重要文化財旧睦沢学校校舎)

山梨県令
藤村紫朗(1845～1908)

肥後熊本藩出身。明治6(1873)年～20年の間に、山梨権令・県令(今の県知事)を務め、養蚕の奨励、道路網の整備、教育の振興などを行いました。

藤村紫朗は、西洋の文化を積極的に取り入れ、文明開化の象徴として洋風の建物を奨励しました。

学問は限られた人のものでなく、国のためにすべての人に必要だと考えました。

特に小学校建設を呼びかけ、明治6年小学校は161校が開校し、就学率は全国第2位でした。

掲載画像出典　近代の甲府の町並みイラスト・藤村紫朗のまんが:甲府市『まんが甲府の歴史 [下]近代-現代編』、他は甲府市教育委員会